

## 第5回 子どもと刃物③

### ナイフメーカーの脳育教育の取り組み

講師／田中麻美子（ビクトリノックス・ジャパン株式会社代表取締役）  
司会／鹿熊勤（日本エコツーリズムセンター）

【たなか・まみこ】1984年から2年間、在フィリピン・インドシナ難民センターで、難民のためのヘルスケア及び移住先での定着指導などに携わる。その後、オーストラリア、ニュージーランドで日本語教師・通訳などの活動を経て、インドネシアに約6か月滞在。1998年に帰国後、ルイ・ヴィトン、サムソナイトなど海外ブランドの日本法人で経営企画、営業・マーケティングなどに携わり、2010年3月ビクトリノックス・ジャパンにマーケティング責任者として入社。ナイフなどアナログな道具を使って細かい手作業をすることの文化的及び教育的意義を啓発する活動を始動。2012年1月に代表取締役就任、現在に至る。



——ビクトリノックスといえば、ツールナイフで世界的に知られるブランドで、130年もの歴史があるそうですね。まず会社のヒストリーからお聞かせください。

田中 ビクトリノックスの創業地は、スイスのシュヴィーツという州です。シュヴィーツは弓の名手として知られるウィリアム・テルが有志を集めて決起し、それをきっかけにスイスの独立運動が始まったとされる建国伝説の地です。ビクトリノックスは、そこで1884年に誕生しました。スイスをご存知の方も多いと思いますが、山国で冬は雪が降り、農耕も容易でない土地です。そうした土地条件のために発展してきた産業が物づくりでした。有名な時計づくりもそんな地場産業のひとつです。

ビクトリノックスの創業地は、もう少し詳しく言いますとシュヴィーツ州のイーバッハという地域で、そこも類に漏れず冬は雪に閉ざされる貧しい村でした。ビクトリノックスの創業者はカール・エルズナーといいます。彼は母親とともにナイフ工房を設立しますが、その理由はやはり、男たちが出稼ぎに行かず家族と一緒に冬を過ごせるようにしたいという思いからでした。カール・エルズナーは、ナイフづくりの技術をフランスで学んできました。なんとか故郷で新しい産業を興し、地域に雇用を創出しようというのが動機だったようです。

カール・エルズナーは、1891年に『ソルジャーナイフ』という名の、皆さんおなじみのポケットナイフの原型となるモデルを作りました。複数の機能を持つブレードが1本のハンドルにコンパクトに収納できる折り畳み式工具で、スイス陸軍の制式品として採用されました。1897年には『オフィサーナイフ』というモデルが特許を得ました。ソルジャーナイフは字のごとく兵隊用の工具ですが、オフィサーは将校のための工具です。刃物、工具だけでなく、ワイン用のコルク抜きがついています。

スイスの国軍に採用されている製品であるということ、非常に優れた品質であるという評価から、スイスの国章であるクロス&シールド（十字と盾）を会社のロゴとして使うことを許されてきました。

ナイフの素材は昔は炭素鋼でしたが、後に錆に強いステンレススチールが発明され、その新しい鋼材の採用を機に、工房の名前をビクトリノックスとしました。創業者のカール・エルズナーを支援した母親の名はビクトリアと言います。また、当時、ステンレス鋼はフランス語でイノックスと呼ばれていたことから、ふたつの名前を合体させビクトリノックスという企業名が誕生しました。

ビクトリノックス・マルチツールは、現在、約130か国で販売されています。創業地のイーバッハはかなり田舎で、今も本社はそこにあります。130年前の工房の建物もそのまま残っています。事業の拡大に伴って工場は大きくなりましたが、本社の所在地そのものは動いていませんし、今後も動かないと思います。地域の雇用に貢献するという創業以来の理念が今も受け継がれているからです。

ビクトリノックスでもうひとつ大切にされていることは「自分たちの作り出す製品は、世の中の役に立つものである」という自信と誇りです。高品質で、機能的で、ずっと長く愛用してもらえる製品を提供することで世の中に貢献したいという創業時の思いが、今も会社のスピリッツとして脈々と生きています。

——日本でも、豪雪地帯では同様の問題を抱えていて、どうすれば出稼ぎをせずに暮らせるかというのは地域の大きな課題でした。たとえば、奥会津では蔓や草などの天然素



材編む技術を生かした物づくりが出稼ぎに変わる冬の仕事になっていました。ビクトリノックスもスタートは小さな工房だったはずですが、国に認められ、さらには世界中で評価されてきました。大企業に成長したぶん、世界恐慌のようなときは従業員の雇用維持に苦労があったのではないのでしょうか。

**田中** 創業時の理念が地域貢献ですので、雇用をどう守るかということにはかなり苦心してきたようです。直近の例では2001年にアメリカで起こった9.11同時多発テロの後ですね。それまで小さなポケットナイフの飛行機への持ち込みは自由だったのですが、たとえ小さなものでも鋭利なものは危ないということで、飛行機の中に持ち込めなくなりました。それによって売上げが世界的に激減したのです。それまではアメリカのホワイトハウスにも外交官のお土産に使ってもらっていたりしていたのですが、売上げが下がったことから生産調整が必要になりました。

でも、そのときもリストラは絶対にしないというのが会社の方針でした。工場の3分の1を止めなければいけない状況に直面したのですが、その間、周囲の企業を回って、社員を一時的に出向させてもらえるよう交渉して、雇用を確保しました。社員は単なる労働力ではなく、仲間だというのがビクトリノックスの考え方です。

——ホワイトハウスの歴代の大統領がプレゼントに選ぶほど評価の高かったスイスのアーミーナイフ。そのアメリカで起こったテロを機に、ナイフの規制が始まったというのは皮肉なことですね。

**田中** 写真を持ってきました。これはジョージ・ブッシュさんのお父さんの時代のもので、それぞれの大統領のサインをメタルインレイで入れ、ホワイトハウスが在任期間中にお土産として使っていたみたいですね。

——スイスの商品なのに、アメリカでこのような破格の扱いを受けていたということは、まさには信用の証だと思います。その裏づけにあるのは技術であり、物づくり立国を名乗ってきた日本にも通じる部分があると思うんですが、スイスの国民性や物づくりの姿勢はどんな感じでしょうか。

**田中** 日本には、細かいところまで気を遣う、あるいはこだわりを持って取り組むという職人気質がありますけども、それに通じるものがスイスにもあるように思います。誠実で勤勉で、手先が器用という両国の国民性はよく似ていると言われます。近代のナイフづくりは、多くの部分で効率のよい工作機械が導入されているので、うちの本社の職人さんたちもすべて手づくりでやっているわけではないのです。けれども、工作機械は自社で組み立てていまして、扱い方の調整などにかなり心血を注ぎ込んでいます。とにかく、よい製品をつくらうと一生懸命で、仕事の姿勢はものすごく頑固。

基本的には、自分たちが絶対に自信があるものしか売りません。たとえば、販売の現場では新しいモデルを入れて市場の新陳代謝を図りたいという声は多いですし、私たち日本のスタッフも要望しているのですが、新製品が出てくるまでには何年もかかります。私たちが試作品を見て「これいいじゃない、売らせてよ」と言っても「いや、まだまだ

気に入らない。パチンと閉じたときのこの音が」とかですね（笑）。そういうやりとりをしていると、なんだか日本の昔の職人さんと話をしているような懐かしい感じがします。

——そのあたりのよい意味での保守性が、日本でも評価の高い理由なんでしょうね。今日の催しをフェイスブックで告知したら、知り合いからたくさんコメントが来ました。ビクトリノックスのマルチツールはいっぱい持っているよ、とか、ツールがたくさんあって構造もややこしいのに、ぜんぜん壊れないんだよねという声がありました。壊れないというのは最大級の賛辞だなと思います。ビクトリノックスのマルチツールは探検家や冒険家、あるいは厳しい現場で働くスペシャリストにも愛用者が多いと聞きます。スペースシャトルのクルーも、搭乗の際には持っていったとも聞いているんですけど、そのへんのお話を聞かせていただけますか。

田中 はい、たしかにスペースシャトルの装備品として使っていたいていましたし、ドイツの宇宙飛行士にも使われていたという話もあります。マルチツールはいわば持ち運びできる工具箱で、ちょっとした修理やメンテナンスは、これ1本で用が足りるこ

とが多いんですよ。私も自宅では台所に置いてありますが、家の作業のたいていのことはこれ1本で用が済みますね。ちょっと切る、ちょっと穴をあける。あるいはちょっとネジを回す。スペースシャトルの中はかなり精



密な機械が使われていると思うんですが、そんな場所でもメンテナンスに使われているということは、特殊な専用工具ばかりで組み立てていると、いざというとき困ることなんじゃないでしょうか。ビクトリノックスのツールに組み込まれているような道具でも対応できる、汎用性の高い仕組みにしておかないと、むしろ緊急時には困るのかもしれない。

1995年に、ロシアの宇宙ステーション・ミールを修理するためスペースシャトルをドッキングさせたことがあったんですが、そのときハッチをはずすのに使われたのはビクトリノックスのナイフだと聞いています。

——私もさきほど、このあたりの記事を検索してみました。すると1991年のディスカバリーでも使われていました。記録装置が故障して、宇宙センターから発信するときの配線を替える必要が生じた。よくハリウッド映画で、時限爆弾のタイマーを解除するのに、この青い線と赤い線のどっちを切るかっていう究極の選択シーンがありますが（笑）、あのようなことに近い事態が宇宙で実際に起こった。そのときにビクトリノッ

クスのマルチツールが使われたという記事が、外電の中にありました。

今日のテーマの軸は子どもと刃物です。スペースシャトルのエピソードを知ってあらためて納得したのは「ナイフを使えないと宇宙飛行士になれないんだ」ということです（笑）。勉強がよくできることも大事だけど、ナイフや工具のような道具の基本的な使い方ができていないと宇宙に出たときに困るし、そういう人はおそらく宇宙飛行士には選ばれないということですよね。たとえばロシアの宇宙飛行士の訓練では、着陸予定地よりも何百キロも離れたところに不時着することを想定して、3日間のサバイバル訓練をやらせるみたいなんです。その時に渡されるのがナタとマッチだということです。それで生き延びる訓練をしているそうです。火と刃物は21世紀の科学の最先端の現場でも重視されている。その象徴がこの赤いビクトリノックスなんですね。

高品質な製品を作る。それによって地域の雇用を守る。このほかにもビクトリノックスの方針はいくつかあり、そのひとつがCSR（企業の社会的責任）だと聞いています。このあたりの取り組みについてお聞かせください。

**田中** CSRの筆頭は環境にやさしい物づくりです。ビクトリノックスでは『グリーンシールド・プログラム』という指針をつくり、環境保全にも積極的に取り組んでいます。ナイフをはじめとするさまざまなツールをつくる工程で金属を研磨する際、大量の水を使います。その水は沈殿させて水と粒子を分離させるだけでなく、濾過して循環させています。研磨屑の中の鉄粉は磁石で回収し、ステンレス鋼の原料として再生に回します。この回収システムによって毎年600トンぐらいの鉄を再利用しています。濾過するため水はきれいです。研磨作業で出た熱もむだなく利用しています。工場建物全体と120戸の住宅棟で使う暖房のうち、92%は排熱で賄われていて、暖房には重油を一切使いません。素材の調達、さらには包装資材の選定なども環境に配慮しています。これら一連の取り組みにより、ビクトリノックス本社はスイス環境保護団体から表彰を受けています。

私たちビクトリノックス・ジャパン独自のCSRとしては、ドクターヘリ（救急医療用ヘリコプター）を支援する活動に取り組んでいて『ドクターヘリ』モデルの商品を販売し、その売り上げの一部を救急ヘリ病院ネットワークに寄付しています。脳育工作キットを使った親子対象の工作教室も、CSRの一環ととらえています。

——『教育と刃物』というこのセミナーも、自然体験活動に関わる組織のCSRのようなものだと考えています。やろうと思ったきっかけは、日本ではもう刃物を使う習慣がかなり減ってしまっていて、子どもたちの発達や成長にさまざまな影響を落としている



という実感があったからです。たとえばマルチツールの発祥のスイスでは、子どもが刃物を使うということに対して、大人たちはどう考えているのでしょうか？

**田中** マルチツールづくりはスイスが誇る産業で、当然スイスではひとり一本以上持っています。子どももだいたい5歳ぐらいになったら…おうちによってはもっと早いかもしれないですが、お父さんがツールナイフを渡し、使い方もお父さんが教えます。教え方は渡すときの年齢に合わせますし、プレゼントされた子どもは、お父さんと固い約束をします。たとえば、開いてブレード（刃）を出すときは、絶対に椅子にすわってしなさい、立っているときに開けてはいけません、とか、立つときはブレードをしまってからしなさいとか。年齢や家庭によって約束の内容も違うようですが、重視されているのは安全に対する責任の意識です。

ナイフをプレゼントされる日は子どもにとっても重要な儀式の日です。お父さんからナイフをもらったことは、自分がそれだけ信頼されている、成長を認められたからだとして子供は感じるようですね。つまりそこでは、責任に対する意識もおのずと生まれるわけです。自分が親から託されたナイフだから、これでケガをしても自分の責任だし、人を傷つけるような振る舞いをしてはいけないという気持ちも育ちます。刃物はすぐれた道具であるぶん、功罪の両面性を持っていて、親はそのことを子どもにしっかりと理解させる責任があります。責任の自覚が絶えず頭の中にあれば、刃物はとてもすばらしい道具になってくれるというのがスイスの考え。日本でもこうなるといいのですけどね。——まず親の意識から変わらなければというお話ですが、田中さんはビクトリノックス・ジャパンに入社する前は、途上国支援のお仕事をされていたと聞いています。途上国と日本、あるいはスイスとの比較でも結構なんですけど、子どもたちについて感じるころはありますか？

**田中** たぶん、どこの国の子どもも本来は一緒だと思うのですが、途上国の子どもたちは遊びを見つけるのがとても上手です。何もないうちに、自分たちで遊べるものをうまく見つけますね。今の日本はあまりにも物に恵まれすぎているので、自分で何かを考えて工夫して遊ぶとか、遊び道具を手でつくり出すという機会が奪われているような気がします。途上国は貧富の差が大きくて、お金持ちの子は日本の子と同じように小さい頃から市販の玩具やコンピューターを与えられているんですけども、貧しい家の子は、そのへんに落ちている空き缶やゴミを拾って、それで遊ぶ道具をつくります。どちらの子が幸せかということは一概に言えませんが、人間的なたくましさという点では、あきらかに遊びを自らつくりだせる子のほうが上のような気がします。

——さきほどから感じていることは、子どもを信頼する、責任を持たせることの大切さです。子どもをいつまでも子ども扱いすると、その子自身が成長しないような気がしますね。昔の日本には元服という儀式がありましたね。まだ12、13歳ですが、今日からは大人として遇するとして自覚を持たされた。つまり甘えが許されない。今はそういうことがなくなりましたね。二十歳の成人式のみっともない映像がニュースになるのが恒

例で(笑)。もうちょっと前に大人への階段を祝う儀式が必要なのかなと。12歳、10歳、あるいは8歳なのかは分かりませんが。

**田中** おっしゃるとおりだと思います。ナイフを子どもにまず持たせて、まずお父さんと約束をしよう。このナイフをあなたにあげる代わりに、あなたはナイフを使う責任をちゃんと持ってね。このナイフは今日からあなたの道具です、ということを宣言することによって、儀式になるんじゃないかなと思います。それにあたっては、親もちゃんと時間とエネルギーを割かないといけません。そういうことを経ていって、分別のつく良識ある大人になっていくんじゃないかと思います。最近の日本は、あまりに便利になりすぎ、また忙しくなりすぎたことで、そういう感覚が忘れられてしまいました。——私が聞いた範囲では、アメリカの家庭でも、子どもがある程度の年齢になるとお父さんがナイフをプレゼントする習慣があるそうです。アメリカは非常に多面性を持った国で、反面教師のような、ああいう国にはなりたくないという側面も多いのですが、一方では開拓時代のような、よい意味での自立精神が今も生きているという話を聞きました。日本人もそんなたくましさを持っていたと思うんですけど、押しなべて消えてしまった感じがします。こうした問題が露呈したきっかけのひとつは、2011年の東日本大震災だったと思うんですね。非常時に身を守る道具としてナイフがクローズアップされた、おそらく初の機会だったのではないかと思います。あの経験からメーカーとして感じたことはありますか。

**田中** 東日本大震災のときは多くの方にマルチツールの力を再認識していただき、じつは売り上げが非常に伸びました。ナイフのことなんて考えてみたこともなかったけれど、やはり備えておいたほうが良いと感じていただいたということですね。物もサービスも至れり尽くせりの生活をしていると忘れてしまいがちなんですけど、ライフラインの一時的な途絶により、人は道具がないと何もできないのだという当たり前のことをあらためて実感したわけですね。避難所にもうちのマルチツールをお届けしましたが、いろいろな支援物資をいただいたけれど、このナイフがいちばん嬉しいですよとっていただいたときは、私たちもとっても嬉しかったです。

避難所って道具が慢性的に足りないんですよ。衣食住に直接関わるものはたくさん寄付されて届くんですが、その箱を開けるにしても、ひも一本切るにしても、やはり、はさみとかナイフのような道具がいるわけです。私たちが避難所にマルチツールを寄付して支援しようと思ったのは、じつは阪神淡路大震災の時の経験談を、救命救急センター長の専門のお医者さんから聞いたことがきっかけです。その方は芦屋にお住まいで、家は崩壊してしまったけれど、なんとか当座の食料を避難所に持ち出すことができたそうです。芦屋は裕福な方が多く、高級缶詰とかワインがそれぞれ持ちこまれたそうなんです。そういう容器を開けるための缶切りや栓抜きがなくて誰も開けられないでいた。たまたまその先生はうちの製品の愛用者でポケットに入れていたので、たちまちヒーローになったそうです(笑)。

——プルタブで簡単に開けられる缶詰も増えましたが、海外の製品はまだまだ缶切りが必要ですからね（笑）。端的な例ですが、こういうときポケットにナイフがあるかどうかがあるかが運命を分けたりすることもあるのかなって思います。けれど、先ほどの9.11後のナイフアレルギー現象ではないですが、銃刀法などの規制強化の影響で、ポケットにツールナイフを気軽に入れて歩けない社会状況があります。そのあたりの変化は日本ではいつごろから始まって、それによってビクトリノックス・ジャパンはどのような影響を受けてきたのでしょうか。

**田中** 私が把握している範囲では、1998年に起こったバタフライナイフ事件ですね。中学生が先生を刺すという事件が起きました。あのあたりからナイフ全体に対する締め付けがきつくなったというか、アレルギー的な反応が起きてきたように思います。その後、秋葉原でも無差別殺傷事件がありました。そうすると世論はとにかくナイフが危ないという論調になっていくのです。本来は刃物を悪用する人が悪いのだけれど、ナイフがあるから悪いのだから短絡的な思考になり、道具を取り締まれば問題が解決するという事に話がすり替わってしまいました。

たとえば秋葉原で使われたのは、両側に刃がついて槍のように尖ったダガーナイフですね。実際に人を殺傷する戦闘用のナイフなので、日本には必要のない刃物だと思います。けれども、先ほど言ってくださった、小さなツールナイフまでも危険物とみなし、持っているだけで取り締まられるという社会状況はちょっとおかしいんじゃないかと思えます。犯罪に悪用されるということなら、刃物よりも自動車のほうが圧倒的に多いわけですよ。何でもかんでも規則を作り、これはいけません、これは禁止だというのは、要するに責任逃れではないでしょうか。たとえば電車の中で携帯電話を使わないというのは、本来は良識と自覚の問題であって、鉄道会社がルール化するような性格の問題ではないですよ。乗客どうしのトラブルになった時に責任をとりたくないからですよ。決まったことに従うという素直さは日本人のよき特質かもしれないですけど、それが同調圧力を許しているのだとしたら危険な兆候かもしれません。

——法律がつくられるときってムードのようなものがあって、そうだそうだっていう空気の中で議員立法化されたり、行政側が先手を打ったりするんですけど、その後の検証がされないんですよ。多くの法律には消費期限がある。制度が実情に合わなければ変えなきゃいけないのに、一度決めたらなかなか変わらない。そうかと思うと、世論がざわざわしだすとあっさり変えてしまう。それはたいてい規制の緩和よりも強化の場合ですね。世の中を窮屈にする方向には簡単に動いていく。これは国民性でしょうか。

**田中** これはだめだって決めておけば楽なんですよ。先ほどの子どもの話で、ナイフを持つうえでの責任と自覚という言葉が出ましたが、いちばん簡単な管理方法は、ナイフを持たせないことなんですよ。ハラハラしながら、こうして使いなさい、こうしないと危ないですよと教える必要がない。そういうルールを決める人は、これこそ最良の解決手段だと思っているわけですよ。でも、そういう選択は危ないです。こうした極端



な判断を法律にどんどん適用されていったら、日本はどんな国になってしまうんだろう、怖いなあという気持ちがあります。

——ところで、販売を世界的に展開しているビクトリノックスでは、日本市場はどれぐらいの位置づけなのでしょう。

**田中** けっして大きくはないですね。やはりいろいろな取り締まりがあったり、ナイフは危ないという社会のアレルギー的な反応もあったりして、売り上げは下落していました。いまビクトリノックスは、日本では年間 20 万本ぐらいナイフを売っています。国別順位でいくと、それでも 10 位くらいです。売り上げ構成比は全体の 1.5% ぐらいで、売り上げのほとんどはヨーロッパとかアメリカが占めています。さっきの話にもありましたが、ヨーロッパやアメリカでは、男の子はナイフを使えないとかっこ悪いぐらいの感覚が今でもあります。みんな持ってるし、道具として使えます。日本のように、子どもにナイフを持たせるのは危ないという親はそれほどいません。刃物は道具であり、これを使いこなすことは暮らしの基本だという認識が社会にあるからですね。

そのあたりも、国別の売上比率に表われているように思います。でも、おかげさまで、こここのところまたちょっと持ち直してきているんです。やはり震災以降、非常時に役立つ道具として再評価していただけるようになったことと、脳育ツールとしても最適だという意識が少しずつ広がっているためだと思っています。

——大学生を対象に「刃物を使えますか」というアンケートをとったことがあるんですが、ちらほらあるのが、「危ないという理由で親が握らせてくれなかったので使えません」という答えです。「自分は料理ができるほうです」という答えも多いんですけど、じゃあ砥石で包丁を研いだことがあるかと聞くと、研ぎまではしていない。家族が研いでいるところを見たこともないという。これはたぶん、今の日本の標準的な家庭の状況です。本来、刃物を使うということと刃物を自分で研ぐということは対の行為です。家庭の中で研ぎが行なわれていないということは、刃物の問題は、すでに子どもたちの指先だけの問題ではなくなっている、ということを示しているのではないかと思うのです。

**田中** いま小学校に通っているお子さんたちの親御さん自身が、もう道具を使わない世代ですからね。最初に、日本人とスイス人は勤勉で誠実で指先が器用な点が似ていると言いましたが、3つ目の指先の器用さは取り下げないといけないかもしれませんね。実際には、もうかつてのような国際競争力は失っているのではないのでしょうか。個人個人の高い人間力は、資源に乏しい日本の大きな切り札であり、それが世界でも一目置かれるポイントだったと思うのですが、いちばんの武器である指先の器用さが失われてしまっているわけですね。私は、これからの日本のことを考えるととても心配になります。日本人から器用さを取り上げたら、どんな取り柄が残るのかなって。勤勉さや誠実さも、やはり器用さにしっかりつながっていたと思うんです。

——第一部のクラフト教室は、五感教育研究所の高橋良寿さんをお願いしました。その中で、子どもの運動野の半分以上は手に関わっているというお話がありました。草花遊

びでも、物づくりでも、とにかく手を使ってたくさん遊び、たくさん発見する体験から、ものごとが概念化できるようになると聞いて、たしかにそう感じます。理屈じゃないんですよね、子どもを育てていくって。前回のセミナーでも、プレーパークせたがやの天野秀昭さんが、教え育てるといふ教育の視点は大人の傲慢だおっしゃって、なるほどなあと感じました。人を育てるといいながら、われわれは人間を人間として育ててきたのでしょうか。どこかでやり方を間違ってしまうんじゃないか。その分岐点こそが刃物の位置づけだったのではないかと思います。

**田中** 刃物を使った事件は今後も起こるでしょう。でも、そのとき考えるべきは、なぜ事件は起きたのか、何が悪かったのか、何が問題なのかということですね。凶器としての刃物のごく表面的な一要素でしかないんですが、そういうところに過敏に反応してしまう社会の思考ってなんなのでしょうね。メディアがそうしているのかもしれない。でもメディアにそういう視点を持たせているのは、視聴率や部数のゆくえを握っている世間なのかもしれません。

——そういう風潮に一石を投じる活動を、日本エコツーリズムセンターとビクトリノックス・ジャパンは、たまたま同じ時期にスタートさせました。同じ考えを持っていただいたことは非常に心強い思いです。いまビクトリノックスが力を入れている脳育教育の取り組みについて、詳しくお話を聞かせてください。

**田中** 指先を細かく使うことが子どもの脳の発育・発達にとってどれだけ大切かということ、五感教育研究所の高橋さんから教えていただいたことが、脳育教育を始めたきっかけです。ビクトリノックスのナイフを使ってヒノキの箸と竹とんぼをつくってみようというものなんですが、正直言いますと私たちも最初は緊張しました。間違ったらケガをしますから。でも、そうした緊張のなか集中することって、子ども自身にはとても大事な体験だと思うのです。ナイフでこつこつ削ることで、だんだん思ったとおりの形になっていくときのリアルな達成感も、今の時代にはとても貴重です。大人の私がやっても、物づくりって楽しいですよ。いろいろな思いを込めて、親子向けのワークショップですとか、このような催しの際に参加させていただいています。

——何年ぐらいから始まったんですか？

**田中** 具体的活動を開始したのは2010年からですね。だんだん皆様からのニーズも増えてきて、お声をかけていただくようになりました。サッポロファクトリーというサッポロビールさんのショッピングモールではすでに4回やらせていただいています。大好評で予約枠がすぐいっぱいになります。代々木公園のアウトドア・デイにも参加しています。代々木は事前申し込み制でなく当日受け付けなんですけど、2時間も前から並んで待つ方がいらっしやいました。

——社会的なニーズは確実にあるんですね。ところで、こうした教育的な取り組みは、スイス本国では行われているんですか？

**田中** 欧米では今も家族の中でナイフの使い方を伝承していく文化があるので、ビクト

リノックスが乗り出してやる必要はないんですね。日本の場合は、私たちメーカーが積極的に提言し、機会をつくっていかないと伝承されていかない状況に入っています。本社にも日本の特殊な事情を報告していますが「いいことだからこっちでも検討してみようか」というような流れができはじめています。

—どんな方が脳育プログラムに参加されますか。

**田中** 参加の際には必ず保護者の付き添いをお願いしています。親子じゃなくてもいいんですけど、大人がついてやってくださいと。参加するお子さんの年齢は、7～8歳が多いですね。でも小さい子だと3歳ぐらいでも参加します。親御さんは30～40代が多いですかね。皆さんに「何歳ぐらいからナイフを持たせたらいいと思いますか」と聞くと、やはり7～8歳と答える方が圧倒的。このあたりの感覚は、開催する地域によっても違いがあるようで、たとえば北海道で同じ質問をすると、子供にナイフを持たせたいと思う年齢は少し下がるんです。北海道の歴史や気質も背景にあるのかなと思っています。



—安全管理はどのようにしていますか。

**田中** うちのスタッフが全部教えて管理監督するのではなく、保護者の方に一緒に説明し、ナイフを使うときは保護者が教えてください、自分自身できちんと子どもを監督してくださいとお願いしています。メーカー主催のイベントといっても、これはPRでも顧客サービスでもなく、あくまで教育の機会を提供するというCSR活動です。はじめは無料でやっていたんですよ。でも、途中で参加費をいただく制度に変えました。無料でやっていたときの会場はショッピングモールだったんですが、買い物の中に子どもの面倒を見てもらえる…という感覚で利用する方があったんです。それでは困るんですね。理念に共鳴してくれる意識の高い方との選別が必要だということで、有料にさせていただきました。

—リスクの説明はどうしていますか？

**田中** 使いようによっては危ないものだという事は、言わずもがなのことですが、ちゃんと説明をして、自己責任でやってくださいとお話ししています。親子で一緒にチャレンジし、絆を深めていただくきっかけにさせていただきたいという説明もします。もちろんケガをすることもありますが絆創膏は用意してありますけど、幸い絆創膏で間に合わないような大きなケガをされた方はいません。緊張感を持っていただくことが大事なので、よく切れるナイフですから、ここは気をつけてください、こういう使い方はしないでくださいと、最初にお伝えしています。

—今後、自然体験活動の現場でも刃物教室は重要なプログラムになっていくと思っています。その場合、ひとりが目配りできる人数ですとか、そのためのリーダー教育とはどのように考えていったらよいでしょうか。

田中 ひとりの目の届く範囲というのは4～5組までかな、と思います。なので、1回の参加人数はスタッフの陣容に合わせてもらっています。もちろんスタッフの習熟度も大切です。自分がナイフの使い方をマスターしているだけでなく、ナイフを使ったことのない人の心理や行動様式にも通じていないと、サインを見逃して不用意なケガを招くことになってしまいます。リーダー教育では、自分にとっては当たり前のことなので人も同じように扱うだろうという思い込みを、まず排さないといけません。ビクトリノックスのナイフには背バネが入っていて、開くとパチンと止まる場所があります。そこまでゆっくり持っていかないと固定できないんですけど、最初に説明しないと使い慣れていない人にはわかりません。戻すときときも、このバネに気をつけないといけません。パチンと強い力で戻りますから、もし指があるとさまれて切れてしまいます。持ち方の基本的なところから最初に説明をする必要があります。

—参加にあたっては、同意書のようなものをいただくのですか？

田中 はい、いただきます。ナイフの操作は自己責任ですので。たとえばスキューバダイビングのときも、もしもの場合にそなえた同意書に署名をしますよね。実際にトラブルが起きたとき、その同意書が法的にどこまで効力を持っているかは法律の専門家が決めることですが、同意書には、それよりも安全意識の喚起という目的があります。お子さんにとっては、ナイフ

を使う際の約束固めという意味合いもあります。

—クレームなどが出たことはありますか？

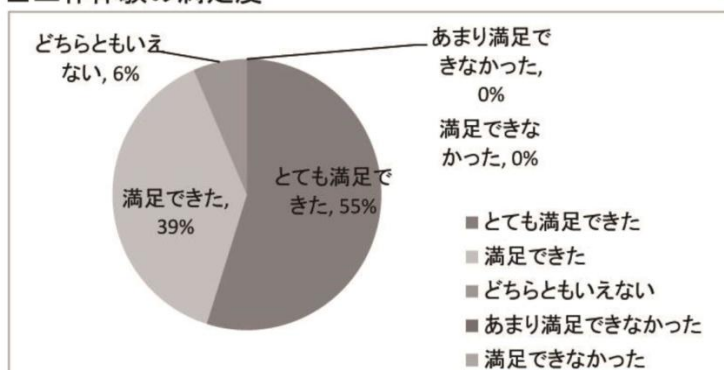
田中 おかげさまでクレームが出たことはありません。つまらなかったという声もなく、多くの方に満足していただいています。ナイフというアウトドアの道具というイメージもあります

が、あえてショッピングモールや都市公園のような場所で開催してきたことに大きな意味があると思っています。しょっちゅう親子でキャンプに出掛けている家庭では、それなりにお子さんもナイフが使えるはずです。私たちがいまフォローすべきは「ナイフってなに？」という親子なんです。開催してみると、実際にそういう親子が参加してくれて、皆さんよかったといってくれます。うれしいことですね。

—脳育研究所の高橋さんにも、感想やご意見を伺えればと思います。

高橋 私が関わっている横浜市の青木小学校では、5年生全員がナイフを使います。箸を作ったり、がりがり飛行機をつくったり。もちろん校長と担当教員には、こういうフ

■ 工作体験の満足度



「どちらともいえない」と回答した2組はどちらも「木が堅い、太い」など工作の難易度に対する満足度の低さ。うち1組は子どもが6歳。

オーマツトがあつて、達成することによって自己肯定感、自尊感情が明確につき、コミュニケーションもよく取れるようになると説明します。刃物で物をつくるって、つまり成功体験の醸成なんですね。自分に自信を持たせる。成功体験をして自信が持てるようになると、人に対してもやさしくなるし、積極性が出てくるんですよ。

——成功体験。いい言葉が出ましたね。自分の成長がいちばんわかっているのは、本人なんですよ。そういえば、何かを成し遂げたときの子どものうれしそうな眼の輝きって、なんともいえないぐらいいいものですね。

**田中** ただナイフで木を削っているだけでも、面白いんですよ。たとえばうちのブランドから出している工作キットには、お箸をつくりましょうというのがあるんですけど、ほぼ箸の形はできているんです。自分好みで細く削ったり形をつけたりする単純なものなのですが、削り始めると私も夢中になります。親子で参加するイベントでも、子どものほうはもう飽きちゃっているのに、お母さんが真剣な顔でやっていたりとか（笑）。達成感を得たいというのは、人間にプログラムされている本質的な感情のひとつじゃないのかなと思います。そこを満足させてあげないから欲求不満なったり、いらいらしたりっていうのがあるのかなと。何かを作ろうという共通目標もいいですけど、自由な造形も楽しいですよ。

——前回のセミナーで、プレーパークせたがやの天野秀昭さんが言っていました。子どもたちと竹とんぼをつくっていたら、ある子どもの材料の左右の形と長さがぜんぜん違う。これじゃ飛ばないなと思っていたら、その子は軸の中心を大きくずらしてバランスとり、周囲の予想を裏切ってよく飛んだ。ある子は削りすぎてしまったので、竹とんぼではなく、串に変更したそうです。ところが、その串も短くし過ぎてしまい、「じゃあ、爪楊枝っていうことにしよう」と（笑）。そういう感覚もいいですね。まず楽しむということが道具を使う基本だと思うので。

**田中** 臨機応変、ランダムな考え方の中に、創造力とか工夫する力があるのかもしれないね。マルチツールは十徳ナイフと呼ばれるぐらいいろいろな機能がついているんですけど、じつは使う人の工夫によって何百通りにも用途が増えるんですね。使い方の可能性って、じつはツールそのものではなく人間の側のひらめきなんですよ。

——たとえば、ビクトリノックスのオフィサーについているワイン抜き。あれは何もワイン専用じゃないですよ。社員の方に聞いたら、紐をほどくときなんかにとっても便利だとおっしゃっていました。

**田中** 道具を使う力というのは、突き詰めれば応用力なんですよ。ビクトリノックスのマルチツールは、おかげさまで非常時に役立つサバイバルツールとして広く認知されています。災害の時はもちろん力強い道具なんですけど、普段から使いこなしていただかないと、いざというときの活躍も限られてしまうんです。ですから、防災用の持ち出し袋の中にしまい込まず、毎日のように使っていただきたいです。